

転生。リンカーコアSSSの元病弱アルビノ少女

ちーと

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

先天性の病で様々な自由を縛られた一人のぼっち。

そんな彼女の元に、ある日突如振り落とされた死神の鎌（発作）

それは新たな世界への切符。神様より授かりしSSSランクのリンカーコアと唯一無二の『ちーと』を駆使し、第二の人生を興味の赴くままに楽しんでしまおうというお話。

本当の『地雷』

目次

一期前

籠絡少女

1

籠絡○少女

11

勉学少女

22

勉学○少女

31

邂逅少女

41

邂逅○少女

49

use  
god

57

gift

## 一期前

### 籠絡少女

青い空。

春風が吹き抜ける砂地のど真ん中。

網目に絡んだツタ植物の下で私は目が覚めた。

「…ん？」

肢体は随分と小さく、来ている服は白のワンピース一枚。

髪は前世と同じ白のロング。

「終わった…？」

寝転んだ身体を起こして辺りを見渡す。

手のひらを挟んでしまいそうな古い鎖のブランコ、裏腹に整備の行き届いていそうな滑り台。何の変哲もないベンチ。

大きくもなく、小さくもない広さ。

「…ひはっ」

立ち上がる。

立ち上がれる、この身体なら。

それが嬉しくてたまらない。

「…く、くへへへっっっ!!!」

もう、真つ白な部屋で点滴を受けなくて良い。

肌触りの良いシルクで身を包まれる必要も、太陽の光を避けなければいけない訳でもない。

その事実が現実のものとして骨肉に染み渡り、腹の底から息が噴き出してくる。

「くくくっ、ー！うひひひっ!!」

「あーっはっはっはっ!!ありがとう神様！」

ようやく。

漸くだ。

やっと私は糞みたいに貧弱で、誰からも避けられる肉の鎧から解放された。

公園の中を走り回り、ひとどころでくるくる回って目を回す。

「息がっ！切れ、ても！血が、出ない！！咳もだ！あははははっ！！」  
幸せ。

ゼイゼイと荒い息をつきながら、きつと世界の誰よりも今の私は幸せだと確信していた。

生まれてから十年間、先天性の糖尿病、HIV、アルビノと血友病に悩まされた私はもういない。

此処にいるのは、全く同じ見た目をしただけの別人なのだから。

走り続けていると、だんだん足に力が入らなくなり、ふるふる震えた足が崩れてスツ転ぶ。

「…わあ！血が固まるぞっ！普通の人ってホントに血が固まるんだなあ！」

以前は怪我ひとつする自由すらなかった。血が止まらないから。

食事も制限された。運動もロクにさせて貰えなかったし、末期は四肢が動かなかった。HIVはエイズと違うというのも理解されず、トモダチなんて居なかった。

…いや、これは筆記作業が困難になり宿題を全く提出しなかったのも有るかもしれないが、とにかく学校生活なんて出来なかった。

そう、何もかも持っていなかったのだ。私は。

でも、もう違う。

私はその普通のヒトになれた。

「は、はははっ、ありがとうっ…！、本当につありがとう…神様…今度あつたら、セクハラは水に流しますね…」

コロコロ転がり公園の真ん中で大の字になって空を見る。

思い返すは嘗ての退屈極まった日々。

いつからだろう。点滴オンリーになった日々。

オムツを履かされて、かぶれない程度の頻度で交換される日々。交換するのが男の看護師さんになったときの恥じらい、やがてただの汚物扱いでしかなかったと気付いたときの悲しみ。

物心ついた時、硝子越しに居るハズの親が居なかった落胆。

全てが昨日の事のように思い出せた。

…いや、オムツの件は体感時間でまだ一時間も経っていないのだから当たり前ではあるのだが。

これで忘れていたらとんだ痴呆だろう。

「ははっ、はひ、はっ、はっ……ふう」

変わらぬ青天。

病室の窓から飽きる程の眺めた陳腐な景色も、今となつては全く違う色に見えるものだ。

青と白の二色しかないのに。不思議である。

「…ん」

動きを止めると、微かな眠気が私を襲う。

まあ、多少眠るくらいなら大丈夫だろうと目蓋を閉じ。

オヤスミナサイと心で呟いて、意識を手放した。

「…ねえ、大丈夫？」

どれくらい経った頃か。

次に私の視界に入ってきたのは、栗毛を月夜に色付けられたツインテールの女の子。

見たところ背の丈が同じくらいなので、幼稚園児だろう。

他人の心配が出来るとは、将来が楽しみである。

「ん？誰だキミは」

いやしかし。

もう空はすっかり夜笠が落ちた夜天である。

辺りにあるたくさんの方の足跡から察するに、私が寝ている間に遊んでいた者たちは全員帰路に着いたのだろう。

なら、いくら有望とはいえこんな小さい子が放置されているというのは考え辛い。

「こんな時間まで一人ぼっちだったから気になっちゃって」

「それは此方の台詞だぞ。君の親御さんは放任主義なのか？」

少女は不思議そうに首を傾げる。

「放任主義？」

「あーなんというか、ほったらかしというか…」

「…みんな今は忙しいだけなの。放任主義じゃ、ないかな」

放置されていると認識した瞬間、その表情に陰りが見えた。

……ほお。

何だろうか、この面倒そうな雰囲気は？

非常に興味深い。是非とも根掘り葉掘り聞き出したい所だ。

それと…この子の家族はこの時間まで家に帰ってこない？

良いことを聞いてしまったぞ。

今こそ、神様より授かりし『ちーと』とやらを使ってみるべき絶好のタイミングじゃあないか。

「…そうなんだ、大変だね。寂しかったり、しないかな？」

「大丈夫なの。一人でもちゃんと家の事はやれるから」

起きたならもう行くね、と少女は立ち上がり出口へと歩き始めた。

すかさず腕を掴んで引き留める。

「まあまあちよつと待ってくれよ、五分で良いからさ」

「…三百秒？」

「ほう、幼稚園児なのにもう掛け算が出来るのかい？お利口さんだねえ」

「受験のお勉強してるから」

受験……？

まさか小学校から私立とかいうやつか？

私は所属上小中共に公立だったし、十四で死んだからまるで縁のなかった話だ。

「そつかあ、大変だね……」

「ううん、お兄ちゃん達と比べたら全然大変じゃないよ」

なるほど、やけに大人びていると思ったらそういうことか。

人付き合いが少なく、知能ばかりが独り歩きしているから物事を俯瞰的に捉えている。

そのくせ好奇心だったり親切心だったりで非論理的な行動をとるからちぐはぐに見える。

やはり面白いぞ、この子め。

「…そうだ！此処だけの話、とっつても頭が良くなれるおまじないが

有るんだけど…やってもいいかな?」

「どんなおまじないなの?」

「ふふ、簡単さ。私が君を三秒以上抱き締める」

「ハグするだけで頭が良くなる…?」

「いやいや、それだけじゃない!その上で私がとあるワードを呟きながら頭を撫でる事で完成する…らしい」

「なんだかあやふやなの」

「私も初めてやるおまじないだからねー、どう?やってみる気は」

説明を終えると、少女は顎に指を当てて眉をハの字にすると、トんでもなくあざとい悩み仕草を披露して。たつぷり十秒程思索した。

「お勉強以外にも効果ってある?」

「勿論あるよ?万能だからね」

「:それじゃあ、お願いします」

「任された!…いやそれにしてもホント礼儀がなってるね…」

「それほどでもないよ」

「あるあるって!まあ良いけどさ。んで?キミはどんなご利益が欲しいの?」

「私を…」

「うんうん」

「良い子にしてほしいの」  
ん?..

………は??

自力で勉強できる幼稚園児とかいう現人神あらひとがみにこれ以上何をしろと?

「むり」

「えっ……?..」

「あつー!いやいやいやいや!?!何でもない何でもないよ!おつけおつけー!良い子にすれば良いんだね?」

「……うん」

「よしきた。こつちおいで、ほら」

一番近くにあったベンチに腰かけて両手を広げる。

正直夜風が脇を通り抜けて寒くて堪らないので脇に腕を回してほしい。

駄目だった。

これまた寒かった首が外気からガードされる。

どっちもどっちだが気分的にはハズレだ。

「…そういえばこれ名前が要るんだった。キミ名前なんて言うの？」

「なのは、高町なのはっていうの」

「ふうむ、なのは…なのはねえ」

何処かで聞いたような名前？

ここ数年間ではないだろうけれども、聞き覚えのある響きだ。

うむ、わからん。取り敢えず『ちーと』の試運転を済ませてしまおう。

「よしよし、『もう大丈夫だよ、なのは』」

「…ふえ!？」

まずは一段階め、適当な声掛けと最後に名前を呼びつつ頭を撫でる。

この時対象の鼻を鎖骨と心臓の中間に位置させると効果が強まる…らしいので少し高めの頭を撫でながら位置調整。

『私なのはのお世話ずつとしてあげる』

「ふあ、あ、あ…う…」

なのはの目がトロンとなってきた。

二段階め、活動に対する支援の意思を込めた呼び掛け。

今度は後頭部から背中にかけてゆつくりとすりすりしてやる。

声は聞こえるかどうかという音量で耳元に囁きかける感じだそう  
だ。

『私はずつと守ってあげたい、なのはの事を』

「…あ」

今のところは上手くいっているらしい。神様が言っていた通りになのはの身体から力が抜け落ちた。

三段階め、その身を案じる声がけと両腕での抱き締め。

肩甲骨の真ん中で腕をクロスさせる。上からでも下からでも大丈夫だけど、頭のポジションからして大抵上からだろう。

私もなのは腕が首からずり落ちたので上からである。

『だからお願い、貴女を愛しても良い?』

「……………」

離された腕が再び絡み付いてくる。

なのはの身体に力が戻って、再び私を抱き締めてくれる。

…これで四段階め。このワードはほぼ固定。老若男女の差だったり立場だったりで多少変化するけど。

後は相手の返事が肯定であれば次に進める。

「……………はい…わかったの…」

アンリミテッド・マターナル!

「…よし、最終契約『無限の母性つ!』」

五段階め。

魔力を込めた呼び掛け。ここで抵抗されたら契約はおじゃんにされるし、四段階めまでとは違って、失敗したらもう二度と同じ対象にはこの『ちーと』が使えなくなる。一番緊張するところだ。

三分程経過して、私の『りんかあこあ』からゆっくりと放出された魔力が全てなのは『りんかあこあ』に吸収される。

確かそのコアがある人に使うと私のコアが吸いとられるんだっただけか?

思ったよりも吸いとられて驚いた。

…いや吸われすぎじゃね?

十分経つても吸収は止まらない。

じわじわ萎んでいく私のリンカーコアと、反面瑞々しく輝きを増して大きくなるなのはのリンカーコア。

…やばくね?

確かあのセクハラ神様は私にSSSランクのリンカーコアを下さった筈なのに…

もう一割削られたとはいったいどういう了見なのか。

でもこの才能譲渡によってリンクが繋がり、様々な能力が使えるようになる…筈だ!

そう考えればとんでもない天才と縁が結べたのだから良いのだ！

…良いん、だよな……？

それから二十分が経過、つど三十三分。

ま

だ

お

わ

ら

な

い

なんだこれ？あたまおかしいよ…（ドン引き）

ていうか姿勢保ち続けるのホントにしんどい。でも一種の儀式みたいなものだからあんまり姿勢を崩しちゃだめだって神様言ってた。頑張らないと。

更に二十七分後。

もうむり。

マターナルじゃないよこれアンリミテッドがエターナルしてるんだけどまだ終わらないの？ホントに腰が痛くなってきたんだが？つていうか首が痛いし、大きい関節は大体なのは体重掛かってるから全部痛い本当どうするのさこれ。

んで。

…最初のリンカーコア吸収からかれこれ四時間が経過しました。

もう六割しか残ってないよ。段々スピードが落ちてきてるのがせめてもの救いかもしれない。

更に一時間が経過。

死にはしないが寝れない寒さが辛いなあ。

なのは何か溢れた魔力で防御されてるっぽい。  
私は逆で、ずーっと空腹感に襲われて頭痛いしプルプル震えてきたよ…

なのははぐつすりおねむさんでかわいいなあ  
これも『ちーと』の効果だったかな？

愛されるかわりに愛情を抱くようになるっていう。

コア持ちでリンクが強いからか尚更可愛くみえるよ…ぐつすりおやすみね…

おはよう ☀️?

朝焼けって綺麗だよね！ ?️?️?

やけに辛い理由分かりました。

私なのはにバリアみたいなの張ってたみたい。

魔力消費ゼロ。代わりに寒さも風も全部私が味わいます。

まさに母性愛って感じのバリアだね。

辛いのは私だけだし、実際にバリア分の体温奪われてる訳でもないから本当我慢さえ出来れば最強らしい。理論上核何個落とされようと私が無事ならなのは守れる。遠隔無敵バリア。

すごいチートだな（白目）

わーようちえんのそうげいばすさんだよ

かわいいね

あーあ。とおりすぎちゃった。

つらい。

もう、十時間以上は経ったかな。

やっとリンカーコア君が身体に帰ってきたよ。

五段階め、完了だ。

…二割以下しか残ってないね。ランクにするとA A十くらいかなあ…

SSSと比べると余りにも弱く見える…いや、多分この世界じゃ十分強いんだろうけども。

なのはちゃんって何者なのさ、一体。

## 籠絡（一）少女

はてさて、今私はどこにいるでしょうか。

高町家の道場にあります。はい。

なんか結構大きな家にすんでるんだなあとつまらない感想を吐いたりして。

「それで、昨日なのははどうしてた？」

なのはのお兄さんと対面しとります。

砂まみれの傷口と若干よだれのかかったワンピースを見かねたそうなんだけど…何かこの人怖いんだよなあ、雰囲気というか、佇まいと言うか。

いかにも武道に精通してますって顔してるし、何より服装が胴着だし。なんなら竹刀背負ってるし。

取り敢えず威圧感凄いから正座っていうのはやめた方が良くと思っただよ。うん。

だってね、幼稚園児なんだぜ？こちとら見た目は。

そのくらいの子に正座は流石に厳しすぎるだろう。

まあなのが家に帰れなかったのは間違いなく私のせいではあるのだけれども。

文字通り神の才能を八割強プレゼントしたんだから昨夜の事は相続税がわりのなんちゃらとして受け止めてほしい。

いや、彼が魔法の事なんか知ってる訳がないんだけどね。

うん。だから説明しようにも説明できない。

私ってリンカーコアは強くても魔法知識はさっぱりだから。

それっぽいのは『ちーと』の副産物くらいかな？

…でもあれは本能的に理解しただけだしねえ、最終契約無いと使えなさそうなんだよ。

口先八丁で誤魔化すしかない。

「その、なのなちゃんが遊んでたら急に眠っちゃってさ…起こすのも可哀想かな、と思っただよ…」

どうだ、我が迫真の演技。

どこからどう見ても連絡先を知らずかといって放置も出来なかった幼子にしか見えんだろう…

完璧すぎて才能が怖いね。こりや子役やれるよ間違いない。精神年齢が幼いとかは言わないでくれ。

人付き合いが少なかつたのはHIVのせいで無菌状態を保たなければいけないという深刻な事情があつたんだ。

「…ならせめて自分の家に連れて行ってくれても良かっただろう」

あのさあ…幼稚園児にそんな判断力あると思つてんの？

なのははありそうだけでも、それを基準として他の子に適應すると下手したら大人げない意地悪さんに見えちゃうと思うよ。

「ごめんなさい、家には帰りづらくて」

まあ私は中身が違う、逃げ道は確保済みだ。

神様は家族を用意してくれなかつたからね、ぶつちやけホームレスである。

帰る場所なんて始めつから無いんだよ。

ただ、なあ。

ちよつと厄介な事になつている。

「それで友達に風邪をひかせてたら訳ないんじゃないのか？」

「…返す言葉もない」

そう。なのははまだ目を覚まさないのだ。

もうお昼になるつていうのに少し高めの微熱をキープしたまま眠り続けている。

だからお兄さんだけは仕事を休んで家にいるわけ。

ただ、一応大まかな原因は特定済み。

『ちーと』によればリンカーコアの変調に身体が振り回されているだけだと出た、いやはやこれ以上正確な要因は凶りかねるけどね。

どうしたものか、と頭を回してみる。

「…悪い、少し冷静じゃなかつた。今昼を用意するから待つてくれ」

顔を俯かせていたら何を勘違いしたのか急に態度が軟化した。刺々しかつた空気も徐々に解れて行き、お兄さんが道場から出て行くとする。

…待てよう。良いこと思いついたぞ。

「待つてください」

「ん？どうした」

「なのはから聞きました。最近仕事務めで夜遅くまで…下手したら朝まで帰って来ないって」

「それは、君に関係ないことだろう」

「いえ、関係ありますよ。友達のお兄さんなんですから」

「…ふむ」

「なので、一つ疲労回復に効果のあるおまじないを受けてみるというのほ」

「おまじない？」

「はい、おまじないです」

「…悪いがそういうのは信じていないんだ、止めておく」

「そう言わずに。絶対効果ありますから、騙されたと思って！」

この人にも『ちーと』を使ってしまおう。

幸いなことに人気はないし、なのはも寝込んでる。

昨日の公園と同じく、今の道場は邪魔の入る可能性が殆どないシチュエーション。良い環境だ。

「…すぐに終わらせてくれるか」

胴着の端を引っ張られてお兄さんは呆れ顔になった。

…別にいいけどさ、何だろうこの視線。恥ずかしくなってくる生暖かさだ。

「ええ、善処します。それじゃ名前を教えてください、必要なので」

「高町、恭也だ」

なるほど恭也…ね

ふふん、こうなればこっちのモノだ！

あつという間にオトしてやろう。

一段階め、実行。

恭也さんを正座させて膝上で対面し、抱き締めて頭を撫でる。

出来るだけ自然に、身体に負担を掛けないよう注意しながら。

「…えと、『お話をしませんか、恭也さん』」

「ん…いき、なり何…を、…う、ん?…?」  
え?

は、何。精神の傾きを検知された?訝しげな表情なんだが。  
不完全とはいえ神の御業なのに…とんでもない人がいるもんだ  
ねえ、空恐ろしい。

でもセーフっぽい。二段階めに移行。耳元に口を近付ける。  
体格が良いから背中腕をすりすりさせるのがギリギリだった。  
いやその分私の胸に頭を密着させられるから効果は高まっている  
…筈なんだけど。

『恭也さん。体、良く鍛えているんですね。応援したくなります』

「…まあ、…恥じない鍛え方をしてきた自覚は、ある」  
手応えが薄いなあ。

やはり母性愛を与えるってのは、自我の形成が十分に行われている  
思春期以降の相手に相性が悪いのかもしれない。

それが既に愛を十分与えられながら育って来たのか。  
はたまたとんでもない精神力の持ち主なのか。

いずれにせよ相当厳しい相手になりそうだ。

三段階め、ここで脱力させられなかつたら中止とする。

そのまま四段階めが成功しても五段階めの契約中に失敗しそうな  
心配がプンプンしたからね。

繰り返し重ね掛けして警戒心をほどいていけば、いずれ絶対成功す  
ると神様も言っていたし、今は焦るべき時じゃない。

『でも、凄く大変そう。恭也さん、辛くないですか?』

「…大丈夫だよ、今は好きでやってるから」  
く、口調は明らかに変わった…が。

完全に正気を取り戻したっぽい。撤回。

なのはの時は一回で上手くいったのに…歳の差だろうか。  
いや、やはり胸か?男は胸に母性を感じてしまうのか?

…無念だ。

「これでおしまい。どうかな?」

「…確かに、身体のコリが解かれて。凄く楽になった」

その場で立ち上がり、軽く腕を回して満足げなご様子。  
まあ間違いないリラックス効果はあるからね。

失敗しても大丈夫ってわけ。

「また、機会があれば…頼み……」  
ん？

何だろう、拳を顎につけて何やら思索しているご様子。

顔を覗き込んでみる。身長がほぼ倍なので見上げるだけだ。

「…俺は、何を考えているんだ、こんな小さい子に」

一言呟き、頭を振るって道場から出ていつてしまった。

ほうほう。ちゃんと『ちーと』の効果は出ているらしい。

成功したのは二段階めまでだけだったが、それなりに依存心を植え付けられたようだ。

「うーん…」

しかし手強い。

後少しで『ちーと』の副産物が使えるようになる筈だったのだが。  
神様いわく。

三段階以上から使用可能になるのが、魔力的な繋がりを通しての五感と思考、感情の共有。

起動ワードは共有シェア

四段階以上でリンカーコアの波長の調律。応用すれば対象のリンカーコアから魔法を遠隔で発動したり、魔力を頂いたりできる。逆も可。

起動ワードは共鳴レスナンス

そして五段階め。

対象の意識と自分の意識を繋げる。

起動ワードは接続リンク

まだどれも試せていない。

だって、共有はなのは寝てるから寝言を盗み聞くくらいだったら出来そうなもんだけど、やっぱり分かりやすい視覚で発動してみたいし。

共鳴は神様もコツがいると言っていたから、調律に失敗してただで

さえ不安定なのはとリンカーコアに負担をかけるのは如何なものかとも思う。

接続？ははっ。

寝てる人間の意識をトレースしたらぶっ倒れるに決まって…

決まってるん……ん？

待てよ？

…コレ、夢を覗けてしまうのではなからうか。

いや冷静になってみると共有と接続でイケそうな気がしてきた。

危なっかしい共鳴は不要だし…有りだな。

うん、やるか。やろう。

「良し、試運転。『共有』」

目を閉じ、なのはとの繋がりを意識して読み取る。

視覚と聴覚の情報を受け取り、自分の五感を切断。そしてなのはの

思考、感情をトレースして脳に行き渡らせる。

下準備、完了。

「『接続』、なの」

……何？言ってるのかな私は。

なのはに吞まれかけたっぽい？

怖い。

とまあそれはさておき、此処がなのはの夢の世界か。

雲一つない見渡す限りの青空と、水平線が見えるほど広いウユニ塩

湖っぽいところ。現実味薄い幻想景色の典型って感じ。

ただ、さつきから『印象』を叩き込まれるような感覚に襲われてる。

夢の中だとコレはこういうものだっていう絶対認識があるのは有名な話だけど、侵入している側からすると不自然極まりないね。

「何だろう、このイメージ…」

吞まれないように意識を保ちながら湖面を見た印象。

恐らくなのはの中で強い意味を持っている概念なのだろう。

色々ごちゃごちゃしているけれど、何となく疎外感のようなものを表しているような気がする。

やはり、夢って不自然で訳がわからない。

やはりって何だやはりって。まるで体験してきたみたいだ。

「あ、なのは！ねえ、待って！」

「…は？」

私は水面に写った自分に向かって思い切り腕をブンブン振った。

水面の私はなのは…？いや、腕を降っていない。なんだこれ？

いや私はなのはなんだ。私が腕を降っているんだから、なのはが腕を振っていないのは当然だろう。なのはは腕を振っていないんだから。

あれ？

「…ヤバい、頭おかしくなりそうなの」

うん、ウユニ塩湖をじっくり見て観察なんかしたからだな。

間違いない。

今の私はなのはの意識と視聴覚を共有しているに過ぎないのだ。

この世界はなのはの認識であって私の認識ではない。

なのに私は自分の意思で行動出来てしまうから、受け取る情報と齟齬が生じてしまうのだろう。

他人の夢世界では傍観に徹した方が良さそうだ。

干渉も出来なくてはなさそうだが…今の私には難しいと思われる。

「んあ」

幾ばくかの暗転。

次に現れたのは何処か神聖な雰囲気を感じた場所だった。

前方に下り階段があつて、出口なんて何処にもない。

降りたら何故か左階段に私は居て、何故か怖くて怖くて堪らなくなり上の階段に飛び降りた。

どうして怖い？どうやって存在しない床に着地した？そんなのは分からない。あるのは結果と認識のみ。

「…身体が勝手に動くつてのは不気味だねえ」

翻弄されっぱなしだ。かなり夢に吞まれてる。

自分の中の常識が、夢の世界のルールにすっかり服従してしまっているのだろう。

一応現状認識が出来ているけれど、感情と行動のコントロールはかなり危うい。

そろそろ脱出するべきか。

そう考え始めた矢先に、神が現れた。

どうして、とかわからない。なのはじゃないことは確かだが。

神は神なの。とても神聖でたまに降りて来て、沢山の幸福と救いをもたらしてくれる。

それが

……いや、神様って割と俗物だった。

結構セクハラとかしてくるし、デリカシーないし。サービスいいけど服装は正直みすぼらしかったし。

「…そうなの？」

確かに救いは与えてくれるし優しいけど。慈母ってよりかは飄々とした爺さんって感じ。

というか、あの神様さつきまでぼやけて良く見えなかったけど、どうみても大人になった私なんじゃなからうか。

「いや、そんなことはないよねえ…うん」

長い白髪でややスレンダーな身体。

慈母のような微かな笑みを携えて椅子のような物に座り込んでい  
る、神。

それだけならまだ分からないのだが、問題はその特徴的な目の色にある。

黒と赤が規則的に混じったグロテスクな目。

アルビノと健常者成分が時計回りに螺旋を描いて混ざり合うあの目。

神が持つものとしては余りにも不釣り合いなアレは、前世と現世で私が持っている目と同じものだ。間違いない。

「んあ」

世界が桃色の光で破滅して、神聖な場所は良く分からない感じに壊れる。

私はウユニ塩湖の底へと沈んで。

…次に目を開いた時、そこには恭也がいた。

「…もう昼飯できてるぞ？早く来い」

「あ、はい。助かる」

場所は道場。遠くから聞こえて来る車の走る音。

正座しっぱなしだったせいか足が痺れている。

物事に整合性があるって素晴らしい、そんな当たり前の尊さに感謝し。私は生まれたての鹿のようにふらつきながら、リビングへ移動した。

「…にやはは、おはよう」

丁度テーブルに座ったとき、なのはが階段から姿を表して挨拶を投げ掛けてくれた。

「おはよう、天使ちゃん」

「？」

せつかくなので、夢の中のネタを話したのだが。

残念。覚えていないようだ。

まあ、人は毎晩複数の夢を見てほぼ全てを忘れているのだから、むしろピンポイントに覚えている方が不自然なのだろうけれど。寂しいものである。

そう思いつつ、私はテーブルの上にあるスパゲッティのラップを取って食べ始めた。

「なのは、もう身体の方は大丈夫なのか？」

「平気だよ。むしろ元気が有り余っちゃったかも」

「そうか、それは良かった…今日は夕方まで家に居るから、何かあったら言ってくれよ」

「うん、ありがとうお兄ちゃん」

「…ところでなのは？一つ聞きたい事があるんだが」

「何？」

「この子、いつ知り合ったんだ？」

「昨日なの」

「そ、そうか。…名前くらいは知ってるよな」

「知らない」

「…別にこの子のお父さんやお母さんに文句を言いに行こうって訳じゃないんだ。それはさっきお話して済んだ事だから…」

「ううん、本当に、一文字も知らないの」

何だ、その変な目は。

せっかく美味しいスパゲッティを作ったのだから大人しく食わせてやればいいじゃないか、恭也さん。

しかし、名前か。

考えた事も無かったなあ。

病院では名字にさん付けが当たり前だったし、私物や名札の付くような類いの物は一つも持っていなかったから下の名前は忘れてしまった。

かといって私を捨てた親の名字を名乗ってやるのも何だか腹立たしいし、そうすれば名前が無くなってしまう。

うーむ、どうするべきか。

「君、名前は何て言うんだ？」

ええい、今考えているんだ、ちよつと待ってくれ。

名字、名字。自分以外の名字で、それなりに実在しそうなやつ…田中。流石に地味過ぎるし偽名っぽい。

鈴斑。確か最初のオムツマンがそいつだったはず。嫌だ。

築館。これで『つきた』と読む。うん分かりづらい。

ただ、つきの響きは気に入った。下にそれっぽいのを入れれば良いかもしれない。

月下、月沢、月河、月田…うーむ、沢と河は良いな。

悩む。

自分で名前を決められるというのは中々に楽しいし、悩む。

「…月村」

結局、名字は変則的なニコイチに決めた。

築館のつき、を月にして、鈴斑のむら、を村に。それで月村。

中々に綺麗で響きが良いし、目以外真っ白の私にも良く似合っているだろう。

肝心の下の名前なんだが、これはそれほど悩まずに済んだ。

キラキラネームなるものが存在するのだから名字よりハードルは低い。神様から貰ったリンカーコアをもじって、鈴華。

つきむらりんか  
「月村鈴華。世界で一番、好きな名前さ」

何せ自分で付けたんだ。これ以上相応しい名は存在しない。

「よろしくね」

完成したフルネームを名乗る。

ニヤリ、と。私は充実感に擦られて頬を緩めた。

奇妙な瞳も相まって悪魔のように見えるかも知れないが。

それはきつと、

……錯覚だろう。

## 勉強少女

…ほんの出来心だった。

なのに、どうしてこうなってしまったのか。

「世界はいつだって、『こんな筈じゃないこと』ばっかりだよ…っ  
いい加減に現実を受け入れるべきなんだと。」

私は顔を俯かせて、足をカタカタ震わせながら毒づいた。

そう。

… 時間は一時間前。午後の二時までさかのぼる。

三人分昼食の食器をなのはに代わって私が洗わせてもらって。

受験勉強の時間だからと二階にある自室へなのはが移動してしまつた時の事だ。

恭也さんと適当におしやべりしててふと思つたのである。

私は紛いなりにも中学二年生、いっちょ幼稚園児の勉強を見てものも良いかもしれない… などと。

余りにも愚かすぎた。

何が中学二年生か。小学校以来シャーペンの一つも握れなかつた不登校少女が何を調子づいていたのか。

「なのはー！お勉強一緒にさせーて？」

「？鈴華ちゃんも受験なの？」

「そういう訳じゃないけどさ、頭いいから勉強見てあげようかなくつて。どう？」

「それならお願いするの！」

「ふふん、まかせたまへ」

ようし、年長者の知恵をみせてあげようじゃないか。と。

なんなら神様が、この世界で最も重要な才能を与えた、なんて言っていたのも間違いなくあつたし。

受験と言つても所詮小学校。私に出来ない筈がない。そう思つた。

… なのに。

現在。

英語と国語の例文を眺めながら私は絶望していた。

なにこれ。神様たしか頭の方も天才にしてくれてたんじゃなかったつけ…？

「いつも私は…気付くのが…遅すぎる…」

「何で突然跪いてるの」

ひざまずくなんておっそろしい単語良く知ってるね、なのはちゃん  
の将来が怖いよ。

いやさ、前世の自分があまりにも役立たずすぎて絶望してるんだよね。うん。

顔は母親クソ女か父親クソ男譲りか知らんがめっちゃ良かったけど…容姿以外何にもないんだ。

プライドすらないし、学もない。運動も…いや流石にこれは神様が…でも…英語でできなかったし…ああああああ。

「もしかして、文系は苦手？」

「うん、そうかもしれないね…」

「それじゃ別の教科にするの」

「良いのかい？予定とかあるものだと思うんだけど」

「良いの」  
なのはが立ち上がって本棚から取り出した問題集が私に手渡される。

教科は…数学と生物。

ん？生物？

？

は？本気で言ってるの？

この馬鹿に高校生物を学べとおっしゃっている？

いやそもそもこれ幼稚園児が学ぶ内容じゃない。今更か。

「鈴華ちゃん？」

あれ、簡単じゃん。

内容は前世と変わってない筈なのに、めっちゃスムーズに頭へ入ってくるな。

特に数学。公式とか碌に覚えてないのに式を見ただけで何となく答えが分かる。もちろん過程も、なんとなく。

いや、二度やればどうしてそうなったのかも言語化できそうなくらいだ。

「んふふふ…クツクツクツクツ…」

…それだけじゃない。

生物だって、一目見たら完全に記憶できる。

これはとんだ茶番じゃないか、一時間もあれば全て完璧に出る気し  
かない。

思わず声が漏れてしまう。

「いきなりどうしたの…?」

「これが、神の才能…素晴らしい…」

でも何で文系壊滅してんだろ。

『ちーと』あれば人間関係で悩むことは無いと思うし、言語が違っても愛があれば何とかかなりそうではあるけどさ。

何、理系至上主義なのかこの世界。

デジタル化の社会で理系は潰しの効くいぶし銀な才能ではあるけど…英語出来ないのはまずいでしょ。

でも神様判定だといらないのか。

…なら神様を信じよう。きっと大丈夫だ。

「なのは、理系ならどこまででも教えてあげられる。どんどん尋ねてくれ」

「えっと…理系はもう受験範囲超えてて…予習だったの」

「理系なら」

「今やらなくちゃいけないのは、文系なの」

はい。

私がないのは受験で協力できなくなりました。

「そうか、ならば何も言うまい。頑張っ」

ここに居たって勉強の邪魔にしかならないだろう。

本棚から理系の参考書をいくつか拝借して部屋を出ようとした。  
その背に静止がかかる。

「待つの。」

「…なに？」

「苦手分野を避けてたらいつまでたつても総合力で劣る人になっちゃう」

「でも私じゃ、邪魔になるだけでしょ？」

「ううん、邪魔になんて思わない。鈴華ちゃんが一緒に居るだけで、凄く幸せだから」

『ちーと』君？キミたしか母性で籠絡するんじゃないかなかったかな。

なんかなのはの方がオカンっぽくなってるんだけど。

いやそれも愛だよ。だらしのない母さんはなんか放っておけないのも確かに愛だけどさあ。

…受け止めないといけないよね、うん。ちくしよう。

「それに、勉強したいって言ったのは鈴華ちゃんだよ」

「う、それは、そうだけどさ」

「だから得意な理系だけじゃなくて、苦手な文系も一緒に勉強しよう？」

「…ワカリマシタ」

この後メチャクチャ勉強した。

成果？なのはの予定が一日分遅れたくらいかな…ッ！

…全然ダメダメだったって事だよ。ちくしよう。

私の素の才能には期待しない方が良さそうだねえ。

でもまあ根気よく教えてくれたから小学五年生辺りまでの内容は完璧に理解できたけど。

理系とは天地の差だ。あつちは大学ワンチャンってどこまで行けたのに…

「お疲れさま」

日が沈み始め、すっかり赤く染め上げられた部屋の中。

なのはがお盆に麦茶の入ったガラスコップを二つ乗せて運んでき

た。

ありがたく頂いて一息つく。

「んあ、おつかれさま。ありがとねえ、勉強教えてくれてさ」

「えへへ、どういたしまして」

につこりと花咲くような笑顔を零して向かいあうように腰を下ろしたなのは。

かわいいなあ。なんでこんないい子が夜まで外出歩けてんだろ。

「恭也さんは？」

「もう夜のバイトに行っちゃった」

「つまり二人つきりって事…だね」

「…うん」

誰にも邪魔されない空間。向き合う二人。となればもう予想はつくと思う。

「なのは。おいで」

両腕を広げて目を瞑り、裁量をなのはに委ねる。

求められたら与えよう。与えられたら求めよう。それがこの、『ちーと』の本質<sup>アイ</sup>なのだから。

欠けた心の隙間に染み込んで、自分の色に染め上げる。致死に等しい遅効性の甘い毒<sup>アイ</sup>で。

一に干渉、二に擁護。

三の庇護で無抵抗にして、四で扇動し、求められれば五で与える。それが、この『ちーと』だ。

「仲間外れにされてるって感じた時、『私は絶対』いるから」  
思ったより、私もこの毒に侵されているのかもしれない。

前世の私は、独占欲なんかとは無縁だった。

だって、独占したいと思うほど何かを好きになつたり、愛したことなんて一度も無かったから。

医者には『愛着障害』だと診断されて、暫くしたら腫物扱い。

普通の食事が取れなくなると、当然ながら痩せ細る。そして唯一の長所だった容姿も醜く変わり果てた時、周囲の人間の態度はいつそ笑

いたくなるくらい冷たくなって。

そのころだろうか、『心因性失声症』を発症したのは。気が付けば身体も心も出来損ないで。そのくせ他人の金を湯水のように消費する役立たず。

・・・それが私の評価に変わっていた。

生きている意味なんて、死ぬのが怖い以外何にもなく。

それでも人権保護団体なんてモノに絡めとられたばかりに、彼らの正義に縛られた狭い世界の中、無関心な視線に晒されて生きていた。

その時は、『いつそ中東にでも生まれてれば楽に死ねたのに』って何度も心の中で恨み言を唱えたよ。

でも、そんな私に本当の救いをくれた神様が居るのだ。

その人のおかげで私は今ここに居る。『誰かを愛することが出来るようになった』。

だから

もう

この『愛』を抑えるような真似は絶対にしない。

それは神様への冒瀆だから。

だから。

初めて私が愛した仔・・・

高町なのはには、私の注げる限り無い劇毒アライを与える

「り、んか、ちゃん・・・」

なのはの目から光が薄れる。完全には消えないけれど。

いつか私と同じ、光のない目にしてあげるからね。

「ほら、あとすこしだよ？なのは」

一步、二歩。よたよたと近づいてくる。誘蛾灯に鮮やかなアゲハ蝶が近寄っていく。

それが心底心地良くて堪らない。頬が吊り上がり、目が細くなつた。

歯が剥ける、日陰になったなのはの顔を爛爛とした瞳で見つめ、待ち構える。

後一メートル、七十センチ、五十、三十、そして——ついに触れ

合おうかという

その瞬間。

「なのは!?ごめん!今日、晩御飯作り忘れて... た...?」  
眼鏡をかけた女がこの部屋にズカズカと上がりこんで来た。

... 誰だ、この女は。

あと少しでなのはを取り返しのつかない深みに引きずり込めたはずなのに、邪魔を。

魔力は纏わせるだけでも簡単な身体強化にはなる。

バカ魔力にモノを言わせて殴り殺してやろうか。

そう思い部屋の入り口に向かって腰を上げた瞬間、後ろからなのはの声が聞こえた。

「お姉ちゃん...? どうして...」

「今いったでしょー? 晩御飯作り忘れてたからあわてて帰ってきたの!」

... そう言えば、確かにもう夕餉時だというのに食事をする気配が無かった。

そうか、想定外だ。

あまりに迂闊すぎて自分が嫌になっちゃうね、ほんと。

... あれ?

私、麦茶飲んでから何してたんだっけ。

「ねえねえ! そのすっごく白い子だれ? かわいい!」

「くあ! かわいいだなんて、そんな...」

「謙遜しないでいいの! く! なのはの友達? 名前なんていうの?」

なのはのお姉さんだろうか。結構グイグイくるタイプだけど嫌いじゃない。何だか仲良くなれそうだ。

それと... 可愛い自覚はあったけど、改めて褒められると何だかむず痒くなるな。

「顔が熱くなるのを感じるよ。恥ずかしい。」

「あ、えっと、つきむらりんか月村鈴華だよ。よろしくね」

「へえ名前もかわいいね、すごい良く似合ってる！」  
はい。

「……はいたった今決めました。私の脳内会議全決です。この人絶対『ちーと』の餌食にします。もう確定事項です絶対変えられません！」

五段階まで三分で落としてやるぞ、このお人よしめ。

性格の良さを後悔するがいい。覚悟しろ。

名前を褒めるのはあまりにずるいじゃないか……

「鈴華ちゃん…… 続きは？」

「へ？…続き？」

え、なに怒ってるの。

もしかして…… 記憶無いのって勉強中の寝落ち？

まさか、まだ英語を唱えなきゃいけないのか？

もう三時間以上かかりつきりでもらってるから言いづらいけどさ、私限界だぞ。

もう勉強なんかしたくないんだけど。

それに夕飯だつて言ってるし、今日はここいらで終わりにしない？

「……ムリ！終わりにして、お願いだからあ……」

「もう、鈴華ちゃんから言い出したのに……」

うわもう間違いない。勉強だったんだ…… なのは鬼教官すぎ。

「あー…… 何となく分かったよ。なのは、勉強会してたのね」

「お昼からずっとしてたの」

「もう疲れてるみたいだし、勘弁してあげたら？それに、なのはの勉強に普通の子はついてこれないって」

んむむ！失礼なことを…… 私だって理系ではなのはに勝っているのに。

なのはのお姉さんに私の借りてた数学のノートを見せる。

「ええ…… 私より進んでる…… 鈴華ちゃんも天才だったかー！」

するとお姉さんは手の平を額にあてて大げさにのけぞった。

一挙一動がいちいち大げさで面白いなあ、この人。

っていうか多分合わせてくれる。幼児相手だしね。

「いや、理系以外はさっぱりでね。なのはには文系の猛特訓を受けてたんだよ」

「へ？そうなの？」

「うん本当に鈴華ちゃんは文系はさっぱり」

「なのは…」

私とお姉さんの声が被った。

分かるぞ。無慈悲ってやつだな。

「あの、なのはのお姉さんですよ。名前はなんて言うんですか？」

「言っていないけ」

「言っていないです」

つつけんどんな返しの何が面白かったのかひとしきり笑って、一分くらい経って口が開かれた。

「ごめんね、なんか初めて会った気がしなくてさ。私、高町美由希っていうの。よろしくね、鈴華ちゃん」

「…よろしくね」

こうして私の長い長い二日目はようやく終わり。

美由紀さんとの出会いと、ある程度の学力を得た。

でも、なんだろう。

ある日突然なのはが居なくなってしまうような、嫌な予感が。

私の胸の中で静かに燻っていた。

## 勉強（）少女

翌朝。東雲のころ。

私は『ちーと』を使用するべく、美由紀さんのお部屋に夜這いならぬ朝這いを仕掛けていた。

作戦は単純。寝惚けさせたまま最終契約までこぎつける。以上。誤魔化す為の言い訳も既に準備済みだ。

昨夜一緒に風呂へ入ったとき、身体が鍛えられているのを見抜いて朝練をお願いしておいた。

始めてのお泊まりで良く眠れなかったから時間より早めに起こしに来た… という体を取る。

く終く

NHK

という訳で早速布団の中に潜り込んだんだけども。

何故か体液の饅えた匂いがする。

開きっぱなしの携帯には風呂上りらしき恭也の写真が表示されていた。

写真整理をしたまま寝込んだのだろうか、服装も乱れていて非常にだらしがない。

特にパンツはいてないのはどうかと思うね。

別にいいけどさ。

「…『おはよう、美由紀』」

一段階め。せっかくなので恭也の声真似を試みた。

昨日ちよつと話しただけの私の声よりも、聞き慣れてるであろう家族の声の方がヘンに刺激しなくて良いだろうしね。

「んあ、れ、恭ちや、ん…？」

おお、良い感じだ。

っていうかこの声真似自分でも驚くくらい似てる。これも神の才能ってやつだろうか、ほんと文系だけが惜しまれるね。

頭の撫で方はちよつと乱暴に。四段階以上は意識が無いとだめだ

し。

あとほら、撫で慣れてなさそうなのを演出する目的もある。

『最近随分頑張ってるじゃないか、えらいな』

「… えへへ」

うつわあざとい。でも間違いなく素なんだろうなあこの人。

かわいい。

二段階めあつさり終了。この調子なら五段階までいけるかも。

「…突然だが、一つ話しておきたい事があつてな」

「な、に…:…?」

そうと決まればスピードアップだ。ムードを壊さないように、さりとて目を覚ましすぎないように。夢心地のまま押し切る…!

「『…これから俺は、美由紀の事をずっと守つていきたいと思つてい  
る』」

「ふえ…?」

え、この人ほんとに恭也さんの血族だよね…? 何で嬉しそうにしてるのかな。

いやまあ良いけどさ。どんな男の趣味してようが人の勝手だし。

恭也はかわいいし。

「これまでさんざん寂しい思いをさせて来て、悪かった」

「それ、つて…ま、さか…」

あ、魔力が抜けてく。

そう言えば神様が言つてた。三段階以上の副産物を利用するには、どんな形であれコアが必要だつて。

無い人もいるつて聞いたからどうするのかと思つたら、こうして解決するのか。

『共有』<sup>シェア</sup>するために必要な、『疑似リンカーコア』とでも呼べそうなものが生成されてく。

つてことは美由紀さんコア持つてなかったんだね。姉妹だから持つてると思つてたよ、意外。

ともあれ脱力もしてるし、三段階目成功だ。

… いけるぞ。

「無理にとは言わない。『だから、お前を愛しても良いか』」  
「… あ… つ… は… い…」

美由紀さんが私をふんわり包み込むように抱いた。非常に動きやすくてよろしい。

意外と『ちーと』は柔軟性が高く、やや変則的だが四段階めも成功した。あとは抵抗さえなければ完了である。

「最終契約 『無限の母性』」  
アンリミテッド・マターナル

疑似コアとは既にかなり強い？がりがあるので、後は『共鳴』で、波長を私のものから美由紀さん固有のものに調律するだけだ。

確か：魂？で波長は決定されているのだとか。

それを読み取れるのはさすが『ちーと』といったところ。

よし、それらしいのを見つけ。一分もしない内に五段階めが終わった。

これだよこれ。リンカーコアが死にかけたりもしないし、何時間も姿勢維持し続けるなんて拷問染みた真似なんかしなくてもいい。

馬鹿げた精神力で抵抗されたりもしない。

これが『ちーと』のあるべき姿だろう。

例外二連発で若干懐疑的になってたけど、やっぱり『ちーと』は強いね。

美由紀さんの腕を振りほどき、体をベッド脇から揺する。

「…あれ、恭ちゃんは？」

「美由紀さん、寝ぼけてるの？恭也は昨晚からバイトに行ったつきりじゃないか」

「え？それじゃ…今までのって、夢？」

「今まで、が何なのか知らないけど。多分夢なんじゃないかな」

「そんなあ…残念」

「どんな夢を見てたの？良い夢？」

「あーいや、あんまり覚えてないんだけどねーうん」

ばつが悪そうに目線を外された。多分覚えているんだろう。

まあ、流石に相手が幼児とはいえカミングアウトはムリらしい。そこは良識的だったか。

「それで、どうしたの？まだ時間には早いと思うんだけど」

「ちよつと良く眠れなくてね…目も冴えちやつて、つい」

「…もう。時間ってというのは、早くても遅くても駄目なんだからね？  
わかった？」

「はい、わかりました…。」

うーむ口だけの反省。

神様によれば、私はそもそも罪悪感というものを覚えづらい精神構造をしているらしいからね。

自然に人の尊厳を無視するというか、独自の価値観を至上のモノとして、それ以外の全てを否定するんだとか。

自覚はなかったんだけど、かなりの人でなしっぽい。

「ま、私も目え冴えちやつたし。やろつか、朝練。鈴華ちゃん何したい？ランニング？」

枕元の眼鏡をかけた美由紀さんがベッドから立ち上がって私に尋ねてくる。

ふむ。朝練の内容とな。

ランニング、心肺能力を確認するには向いている。

いやしかしだ、私が今最も興味を向けているのは他でもないこの高町家の道場で行う競技。

床が板張りなのだから柔道ではなく、剣道だろう。

それをやってみたい。

理由？

バスケやサッカーと違って剣道をやれる場所というのは非常に限られているし、道具も必要。自分で始めるにはハードルがやや高い。

それがどうだろうか高町家は。

私有地内の道場なんてレア中のレアを抱えて、昨日のお話中に見たところ道具の手入れも十分。

美由紀さんも指導を渋るようには見えないし、これほど良い環境を使える機会なんて多分滅多にないと思う。

ならばいつでもできるランニングなんかより優先するのは当然の帰結だろう。

「道場で、高町家の剣を振ってみたいです」

「え、うちの道場の？」

「…何か問題でも？」

「いやー、教えたいのは山々なんだけど…門外不出の剣っていうか、剣道じゃないからさ。教えちゃ駄目なんだよ、私」

「なら普通の剣道は」

「そっちもまだまだ見習いっていうか…教えられるような腕前じゃなくて」

門外不出の剣？

え、何それは。何だか凄く強くて恰好良さそうな響きをしているぞ。

古武術とか殺人術とか、そういうやつ？

面白いな、好奇心をいたく撥られる存在じゃないか。

盗もう。

『共有』で全身の感覚と思考を受け取れば良い。

…我ながら悪党で笑えてきた。今更か。

「じゃあ諦めます。私は外でランニングしてくるので、美由紀さんはその剣の練習でも…」

「いやいや、それじゃ私が起きて来た意味ないじゃない！一緒に走ろうよ、鈴華ちゃん」

く、筋が通っている…むしろ私が失礼すぎるレベル。

だって朝四時に起こされて朝練要求からの別々でやろう宣言である。冷静に考えてみるとんでもないね。

これ笑顔で許せる美由紀さんつてもしかして聖人でいらっしやる…？

いや『ちーと』のおかげか。五段階までバッチリかけたんだし。

「…ワカリマシタ」

この後メチャクチャ運動した。

成果としては、肉体もちゃんと神の才能を持っていたことが確認できたくらいかな。

逆立ちで飛び上がった肩車に移行できるとか最早人間業ではない  
と思っただよ。

ランニングもたつぷり一時間やって息が切れず、汗すらかかなかつたのには美由紀さんも驚愕してたし。

後は身体が思い通り以上に良く動く。

なんていうか、バク宙をしようとか体を動かすと、自分が考えていたのとは全く別のバランスや重心で飛び上がったたりして、そのくせ綺麗で理想的な動きが出来るのだ。

身体が勝手に最適解を選ぶと言えば適切だろう。

頭でごちゃごちゃ考えるよりも適当にやったほうが完璧に出来る。

何も考えなくて楽と言っちゃ楽かもしれないけど、私としては中身が体の足を引っ張ってるみたいで少し悔しい。

だって、せつかく授かった才能なのに、使いこなせないなんてそれこそ神様への冒瀆だろう。

だから、少しむきになってトレーニングを積んでしまったのも致し方ない事なのだ。うん。

「おつかれさま。すごいね鈴華ちゃん、私よりずっと良い走りじゃない」「い」

「まだまだ未熟で…情けない」

「もう、そんなに謙遜しなくても良いのに」

ランニング後の柔軟を済ませ、休憩がてらそこらに転がっていたスポーツドリンクのペットボトルでジャグリングしていると、美由紀さんがすぐ傍のベンチに腰掛けて私を見つめた。

何かあるのだろうか。

「一つ気になったこと、聞いてもいい？」

「何かな」

「うちのなのもそうなんだけど、どうしてそんなに大人びてるのかなって」

「…私となのはが？」

そんなことは無いと思う。

夢からの憶測にはなってしまうのだが、なのはは大人びてるだけで

大人じゃない。人並みには寂しさを感じてる。でも、それを知らせまいと我慢するのが人より少し上手なだけだ。

あと私はむしろ卑怯で我儘放題の弱虫だな。大人？アダルトチルドレンにはなれるかもね。

「どうして、なのはが大人びてるなんて思ったのか？」

「ん？だってなのははってき、勉強も家の事も全部一人で出来ちゃうし。何かで失敗しても気付いたところには克服しちゃってるんだもん。鈴華ちゃんは大人びてると思わない？」

「… ずっと一緒に暮らしてきた家族を差し置いて、一昨日出会ったばかりの私が言えたことじゃないですけど。一つ聞いても良いですか」

「何？」

「美由紀さんは、なのはが辛そうな顔をしてるのって見たことあるのかな」

「… えっと、たぶん一度も無いと思う」

… イヤな予感。

ああ、既視感というやつだ。

夢の中で映し出されていた、水平線まで視界を埋め尽くす疎外感。一人で佇む姿。

なーんか身に覚えがあると思ったら。

わたしだ

うん。

今のなのは、前世の私と大して変わらない精神状態なんじゃないか？

いや、素の才能がある程度恵まれてる時点で私とは天と地の差だろうけども、無理してるのに変わりない。

そういう美由紀さん『ちーと』一段階目ではまだある程度喋ってたのに、なのはは言葉をロクに話せなくなってたし。

道理で随分『ちーと』がかかりやすかった訳だ。あんなちみっこが愛に飢えてるなんて、ドストライク過ぎていつそ笑えてくる。

「あの、最後に遊んだのっていつ頃？」

何で口をつむぐのかな。

少し顔を俯かせるって、どれだけ放置してたの。

「二か月以上は、前かも」

… 幼児にとつての二か月がどれだけ長いと思っっているのだろうか。

私は知識でしか知らないが、本物の幼児のなのにはかなり辛いと思う。

「… かなりですね」

「前は居候の人が居ただけどね」

「へえ、それじゃお泊りって明日以降もOK？」

「今はちよつと無理かも」

「どうしてで？」

「お父さんが仕事中の事故で大怪我しちゃって、病院でもまだ目を覚まさないの」

「… ああ、お金の問題ですか」

「そういう訳だから… ごめんね、今は余裕なくて」

「大丈夫。でも、外で会う分には問題ないよね？」

「うん。それなら大歓迎だよ、なのも友達いた方が楽しいと思うし」  
なるほどねえ。家を見る限り経済的に困窮しているようには見えなかったんだけど、大黒柱が死にかけてたってわけだ。

それで慌てて穴埋めをしてるうちに家族間での営みが少なくなつて、結果としてなのはを放置してしまった。

私と話してる内に気付いたのだろう、美由紀さんは沈痛な面持ちをしている。

何というか、よその家には複雑な事情があるんだなあ…

私としては当面の拠点確保兼、なののはメンタルセラピーとしてつきつきりで構いたおしたり甘やかしまくったりしたかったんだけど。残念だ。

「それじゃ、なののはに別れの挨拶でもして来るかな。何も言わずこの

ままバイバイつてのも可哀相だしね」

そして走る事はや数分。高町家へ到着した私は、速攻でなのはに『ちーと』キメに行った。

一度やったところは飛ばせるので初っ端から五段階めと四段階めのループ。時折一から三を混ぜて目いっぱい甘やかした。

…調子に乗ってキスとかしちやったりしたけど、まあ微笑ましいものだろう。

たぶん。

「り、鈴華ちゃん…いきなりどうして…？」

「いやね、もうこの家からは出ていこうと思ってさ」

「…え？」

「これからもその辺うろついていると思うから、それじゃ！」

満足いくまで『ちーと』を使い切った後、私は速攻で高町家を飛び出して公園へ。

到着してみるとわいわいがやがや…とまではいかなくともそれなりに人がいた。

遊具はみな使われているので、公園が見渡せる位置のベンチに座ったのだが。

「…どうなってるんだろ？」

思わず口からは疑問が零れる。

神様は私をどんなトンデモ世界に転生させてくれたんだろうか。

目覚めた時は前世と大差ない世界だと思ったけど、どうも常識がおかしい。

なんせ、道行く老若男女、みんながみんなカラフルな頭してる。

驚かない方がおかしいと思うね。

何より驚くのはその多彩さだ。

赤は分からんでもないし、茶色や金色もまあ実在する。

だが青や緑の連中はいったい何者なんだろうか、人間はそんな色素持っていない筈。

それと、遊んでいる連中を見て気付いたこともあった。

精神年齢がどいつもこいつも年齢の割に高すぎる。

感情の振れ幅は年相応に見えるが、それが介在しない判断が大人染みている。

前世の私に初めて見た人間のクセや意図を見抜くような眼は無かったので、この観察力も神の才能だろうけど…率直にいつて全員気味が悪い。鳥肌すら立つ。

魔法がある世界、それ以外は前世と同じだと思っていた。

なまじ高町家の人間はまだまとも寄りの色をしていたから気付けなかつたんだろう。

しかし…ここは全くの異世界だと今になってようやく理解させられる。

あまり知りすぎると不気味の谷現象を起こしそうなくらいに違和感まみれで、だからこそとても近いと分かる世界。

私以外誰も違和感を感じないという事実には背筋が冷える。

「…怖いねえ」

暫し啞然としていると。

呼吸が乱れていたのだろう、喉が随分乾いてる事に気付いた。

膝につき、水を飲みに行こうと腰を上げる。

すると、赤と黒の螺旋に気付いたちびっこの一人が此方に近づいて来た。

なぜか不安そうに。

「ねえ、どうしてさっきからこっちを見つめてるのよ」

眩しいくらいに綺麗な金髪の女の子、強気だけど優しい目。

視線を合わせたら、うっ、と微かな悲鳴が聞こえる。

まさか、この眼はこっちでも有効なままなのか？

…だとしたら迷惑してるんだろうな。

明るい所だと見えなくて良いモノも良く見えて鬱陶しい。

「何なのその目…気持ち悪い」

## 邂逅少女

金髪の少女が放つ嫌悪感を露わにした目は、私が一番見慣れた目。私の眼を見た人は、みんなそうなる。

：理屈は知らないけどね！

これは前世から持ってたものだ、って転生の時に神様が教えてくれたよ。

特に言及もされなかったし、てつきり何とかしてくれてるものだと思ってたんだけど：

そこまで親切にやってくれた訳じゃないみたい。

すぐ目に流れていた魔力を遮断する。これでひとまず効果が漏れ出すのは止められる。

：…なんで分かるかって？勘だよ、勘。

しっかしどうしたもんだろうか、この子。

眼のせいで嫌悪感バリバリだねえ…：すごく『ちーと』効きづらそう。

「名前も知らない子の話を聞くつもりは無いかな、うん」

でもまあやってみようかなあ。

このタイプは負けん気が強そうだし、軽く挑発を掛ければボ口を出すかもしれない。

それで名前を知ったら、すぐ『ちーと』の餌食にしてやればいい。

幸い、遊びつぷりを『視る』限りこの子は顔も性格も良さそう。みんなが不気味がつて近づかないのを率先して動いたのがこの子だったし。

籠絡してやれば、なのは程でなくても良い仔になりそうな素質を持っているぞ。

「…アリサ」

少女は話すのも嫌そうに、三文字だけ口を開いた。

：…驚いた、まさかホントに上手いくくなって。

言いなりになるのが気に食わなくて教えてもらえない可能性の方が高いと思ってたんだけど。

嬉しい誤算ってやつ。

『生まれつきでき、悪いね。アリサ』

「っーいき… な、りっ…？…何、を…」

別に抱きしめなくても『ちーと』は使える。

不意打ちで頭を撫でながら呼びかけた。

今までで最強の抵抗感だなあ… 眼に耐えられなかったあたり精神が強い訳じゃないんだけど。

自我が強固、心の壁が分厚すぎる。

現状にある程度満足してるのか、入り込む余地なしって感じだし。

余程大切に育てられてきたんだろうなあ。羨ましいよ。

うん。やっぱり眼が合ったのが思ったよりマズイね。

なのは夜の公園で目線を合わせずに五段階めまで行ったからもう平気だったけど、初対面でやってしまうのは完全にアウト。

警戒心が強くなりすぎて三段階めはまず無理だろう。人目もあつてかまるでリラックスしていない様子だし。

… まあ、その手前までは何が何でも成功させてもらおう。

呆けているアリサをがっしり抱きしめ、頭から背中に腕をスライドさせて二段階目に移行。

「偉いなあ、『皆を代表して来たんだろ？ 凄いよ、アリサは』」

抵抗は弱くなって成功だけど、ぜんぜん脱力してないね。

うん終了！ 終わり！

「はあ…？… 原凶が… 何… を？…」

ねえアリサちゃん。

言うに事欠いて『凶』呼ばわりは流石に酷すぎないかなあつて思うよ。

私だって傷つかないわけじゃないんだ。

そこそこつらい。

「ごめんね、居ると迷惑なんだろう？」

パツと解放してやると少し寂しげに手を掴まれる。

無意識だったのだろう、すぐに離された。

「あ…」

途端、遠巻きに見ていたギャラリーがわらわらとアリサを取り囲んで私を睨んだ。

そして、人垣の中でも一際目立つ容姿の少年が私の前に出てくる。

おお、今のところ被りの無い色、銀髪だ。

眼も…オッドアイというやつだろうか、赤と青で恰好が良い。顔立ちも驚くほど整っている。

しかし何だろう、不思議と不気味さは感じないな。

この世界の住民らしい容姿をしているのに、中身はむしろ前世の園児みたいだ。

少し失礼だろうが、神の才能に狂いはない。

幼子らしい稚拙さを持った希少種である。

「我のアリサに何してんだ!?この野郎!」  
は?

アリサは今『ちーと』で私のにしたんだけど。何言ってるんだこの子。

「おい!誰が無視して良いと言った!名前言え!我の『チート』でぶつ潰してやるぞ!」

三秒もしないで切れ散らかす少年。これがキレル若者という奴だろうか、あまりに若すぎる。

いや今なんて言った君『ちーと』?ぶつ潰し?…はどうでも良い。『ちーと』を知ってるのか?

「そうよ!佐神くんを無視するなんて生意氣!」

「『そうよ!そうよ!』」

そうよコールがうるさい…っていうか、よく見てみると公園に居た女の子全員少年の傍に集まっている。

とんだプレイボーイだなあ、ホント。そっちも似たような『ちーと』なのかな。

ちよつとこれめんどくさいよね、と流し目で伝えると、少年は目を見開いた。

何か驚くようなことでもあっただろうか。

「…あー、うん。ごめんね佐神くん、無視しちゃって。邪魔みたい

だから私はもう帰るよ」

私は居ない方が良いだろう。『ちーと』の邪魔にしかならないし、私も邪魔されたくない。

適当にあしらってそそくさ足を進め、ざっと五メートルは離れた。

「待て、雑種！」

だというのに後ろから肩を掴まれる。

佐神くん足早すぎない？音もほんの少ししか聞こえなかったし、相当神様の才能磨いてるのかな。

見切れなくはないけど良い動きだ。

『私の嫁になれ！』

「…へ？」

言うと同時に佐神くんは手を頭に伸ばして来た。撫でられる寸前、寒気を感じ咄嗟に前転で回避する。

…何で避けたんだろう？『ちーと』は相手の名前が分からないと発動出来ない筈なのに。

「躲すでないわ！オイ！貴様らこやつを抑えてろ！」

「はい！」

なんだか『イヤな予感』が、明確な輪郭を持ち始める。

命令を受けてじりじり距離を縮めてくる女子たち。中には明らかに中学生っぽいのも居た。

魔法抜きで突破するのは難しそう、だが今の私は魔法を使えない。どうすれば使えるのかまるつきりだ。

何か気合入れたら出来なくもなさそうではあるけれども、それ以上に。

状況を打破できるかどうか以前の問題として、赤の他人にここまで執着されるのは気持ち悪くて仕方がない。

おぞましい。何故、私に愛されていないのに私へ執着するのか理解できない。

ソレは等価で交換される筈の物。その主導権は私に無ければならないのに。

何故私に執着して、劣情を滾らせられるんだろう？

度し難く、とことん気色悪い。」

「なんだ、佐神くん。私が欲しいのか？」

「さつきからそう言っている、バカか貴様は」

だが… 同時に面白くもあるな、佐神くんのその熱意。

初めて会った人間に、どうしてそこまで純粋な欲望をぶつけられるのかを知りたい。

ゾワゾワと心の底から歓喜の『呻き声』が滲みだして来たのを感じる。

「… なら、男の子らしく一対一でやったらどうかかな？」

「何？」

私は彼の方へ振り向くと同時に両腕を開き、俯かせた貌を上げて両眼を見開いた。

確か後は、魔力を流せば流すほど効果が強くなるんだ。

神の才能をもってしても今のところ制御できてないっぽいから、力の垂れ流しにはなるんだけど…

「ギャラリーの子達には文字通り五分間目を瞑ってもらって、その間何があっても私と佐神くんの邪魔や手助けをしない。公平で良いルールだろう」

眼が合った子は皆後ずさり、自然と一対一の形に。

佐神くんは、私の一メートル前方で静かに立っていた。

しかしヤジは外野から飛んでくるもので、離れた場所から中学生くらいの子が声を上げる。

「佐神くんのやり方に文句があるっていうの!?!ルールはあなたが決める事じゃない!」

分からなくもない。

けど、そっちが仕掛けてきたんだから此方のルールでやらせてもらうのもまた道理ってものだろう。

理由はまだある。今の私は才能を使いこなせてない。

直接殴るぶんには怪我させないよう手加減出来ても、人同士の接触や遊具との衝突までは流石に考慮に入れない。

まず間違いなく怪我人を出してしまう。

それを避ける為にも、お互い確実に手加減できる一対一でやろうと言っているのだ。

「…良いだろう、そのルールでやってやる。おい貴様ら『引っ込んでいろ、怪我をするぞ』」

「う… あ… は、い…」

佐神くんも私の提案の真意に気づいてくれたのだろうか、取り巻きをさらに一歩下がらせ拳を構えた。

「音頭はそっちがどうぞ？」

奇妙ながらも堂に入った構え、半身を逸らしたフロントアタックカーつてところだろうか。

あからさまな隙があるけれど…すぐカウンターに移れるよう脇を締めてある。

「…ふん。ならば早速、スタートだッ！」

防御はほぼ捨てきってるんだろう。恐ろしいまでの攻撃特化。神様の才能すごいなあ。分析もお手の物だ。

「おらあッ!!」

「っ！」

なんて感じに観察してたら、一瞬で距離を詰められた。

振りぬかれた拳をなんとか見切り回避するものの、連撃が打ち込まれる。

肘で弾き、引いたところに当たりに行って威力を殺し。あの手この手を身体の思うがままに防ぎ続ける。

「ぶち抜いてくれる！」

…眼を発動する余裕がない。才能に任せて見切りに徹するのも良いが、面倒だ。

強引に行かせてもらう。

「喰らうがいいー！」

「ぐッ、くうー！」

蹴りを敢えてガードの上から受けた。

芯の通った良い蹴りだ、凄まじい威力で身体が完全に浮き、二メートル程吹っ飛ばされた。

入り口のコンクリートポールに衝突してそのまま蹲り。

地面に額を着け、あたかも腰が抜けてしまったように装う。

実際すごく痛い。

「はッ！初っ端の回避だけか？雑種！」

「う、く…」

だがこれで良い、溜まった魔力を解放するだけの時間は稼げた。

「これ以上は終わりだな。黙って我の物になれ」

「…」

時間はまだ残ってるっていうのに、あの瞬足も使わずにのたのた歩いてくる。

私が言えたことじゃないが、油断しすぎだろう。

出来るだけ満身創痍そうに顔を上げて、佐神さんの足が視界に入っ  
た。

「クフツ」

「何がおか、し…い？」

身体を全力で起こし佐神さんの頭を左右両腕で挟み込む。

目を逸らすような隙も与えない。

鼻と鼻をぴったりくつつけて、視線が合ったと同時に眼の魔力を解放した。

… なんだか眼がぼかぼかして気持ち良いな、コレ。

一旦魔力を吐き出せば暫く暴発もしなさそうだし、コントロールでき  
るようになるまでは定期的に使っていった方が良くもしいれない。

「くひひひっ!!うひひひっ!!」

「…ッ…!!…っ!…」

ただ… 佐神くんの様子がおかしいな。

歯を打ち鳴らして頬の内側を噛み切り、目は充血したまま瞬き一つ  
しない。

痙攣も激しくて少し心配になる。

「あれ？」

「あ。ああ、あ。ああ…」

そんなに言うなら中断しろって？

出来ない。目が破裂しそうな気がした。神の勘が間違う筈無いだろうし、逆らわず更に五秒ほど力を垂れ流してカラにする。

「あー気持ち良かったあ… 佐神くん、大丈夫？」

使い終わると怒りとか、恨みとか、そういう鬱屈とした感情が全部吹っ飛んで至極幸せな気分。

胸のつつかえが無くなったみたいに清々しい。

「あ。」

「終わったよ、君の負け」

目の焦点は外れっぱなしだけど、とりあえず声が出たので話しかけてみた。

ギャラリィは佐神くんを見て困惑しているご様子。

「ギィ———！！ギギィ、！！！！ギギィ——！！！！！！」

次の瞬間。

佐神くんは目をひん剥いて頭を押さえ、足をジタバタと出鱈目に動かしながら奇声を上げだした。

口からよだれと血を垂れ流し、鼻水も涙も何もかも。大も小も漏らしながら発狂している。

… そんなに負けたのが悔しかったのだろうか？

少しオーバーすぎると思うけど。



私は今のところ天涯孤独だから関係ないけど。多分戸籍もないし。「あんたも何かしなさいよ!」

でもこう、泣かれると、その、何とかしないとって気分になるなあ。「そう言われても…?」

…いや待て。

この状況…『ちーと』のチャンスじゃないか?

他の人は居ないし、一段階めの鎮静効果で佐神くんを取り敢えず落ち着かせられるから違和感も少ない。

アリサにもやれば二段階までの二重がけだし、ワンチャン最終契約まで行けるかも。

佐神くんは言わずもがな。現状に満足するような子じゃなかったし、精神も驚くほど脆く見えた。

複数同時にやるのは初めてだけど、成功の目はある。

「良い事思いついたよ、アリサちゃん。そのまま佐神くん抑えてて」

「何かあるの?」

「ある、暫く静かにね」

「わ、分かったわ!早くして!」

揉みくちやになってる二人を解き、両手で頭を撫でる。

『落ち着いて、アリサ、勇人』

「…ア、あ…」「ま…た…?」

一段階めは問題なく終了。佐神くんがおとなしくなってくれたのが功を奏したのだろう、アリサの警戒心が安心という感情でコーティングされていくのが見て取れる。

「あ…佐、神…」

『事情があるんだよね、二人とも』

「ア、れ…ぼレ…?」

二段階めも滞りなく進んだ。

今や私の腕の中には、意識朦朧の佐神くと精神疲労でぐったりのアリサが無防備に曝け出されている。

ふへへ、まな板の上のタイってやつだねえ。おいしく捌いてやろう。

『もう大丈夫だ』

「おお… おえ… あ… ま…」 「あ… あ…」

すごいなあ、さつきまでの様子が嘘だったみたいに二人とも私を好意的に見つめている。

アリサの疑似コア生成と調律も終え、ここまでは順調だ。

しかし佐神くんの疑似コア生成で問題発生。読み取り先の魂的なものが何故か二つ。

大きい方は金ピカで、もう片方は青色。割合で言えば9：1。

「コア候補が二色…？」

私としてはどう見ても強そうな金色をこの体に授けてやりたい気分なのだが、青色の方も不思議と魅力的に映る。確か神様が、魂とリンカーコアはとても近いモノだと言っていた。

ならば一つの身体に二つの魂、選ばれなかった方がどうなるかの想像は容易だ。

「… どうしようかな」

中空を見つめていると、明らかに様子の違う声色が青の魂から聞こえて来る。

念話と言えば良いのだろうか、音は酷くぼやけていて不明瞭。水が耳の中に深く入り込んだ時みたいな感じだった。

『… ボ、く… は… シ、に… たく…』

同時に金の魂からも声が響く。こちらは先程迄の佐神くんの声っぽい？

唯我独尊、大胆不敵。自信に溢れた強者って感じの声をしている。

『黙れ』

その時、コアが金色に染まり始めていることに気付いた。

コアだけじゃない、オッドアイは既に一色と化し、髪も根元からどんどん金色に変わっていく。

『雑種。我を選べ』

まるで、コアの侵食が容姿に影響を及ぼしているように。

魂は何とか拮抗を保っているものの、青の輝きは陰りを見せてい

た。

『た……す、け……て……』

正直に言おう、わけが分からないと。

何故魂が二つあるのか、何故片方が吸収されそうになっているのか。まるでわからん。

『……悩む必要はない。アレを我の身体から消せ』

『た……す、け……て……』

……ただ、上から目線で偉そうに命令してくる金ぴかと、死に物狂いで助けてくれと懇願する青。

神様の慈悲に救われている身としてどっちを助けたいかと言われれば、答えは決まっている。

「助けるよ。『だから、私の愛を受け入れてくれ』」

四段階めへ移行。

二人とも首を縦に振り、何とか私を抱きしめてくれて成功。

これで四段階めの副産物<sup>レシナンス</sup>が使える。

『共鳴』

青の波長を読み取りコアの調律を開始。

『……貴様!?!、何を!』

「黙って」

変えた傍からノイズが入り、金色に戻される。何度やっても抵抗されて、完全には変えられない。

リンカーコアの調律が思ったより難しい。明確に失敗はしないし、どうすれば良いのか何となく分かるものの上手くいかない。

ゴールがはつきり見えている分もどかしい……

『止める!アレに何故肩入れする!』

「ぬむむむむ……」

金も必死に波長を乱してはいる。が、変化速度は秒単位で早くなる。疑似コアの構造と魂の繋がりを完全に理解した。

強引に全パターン解析を終えて上書きしまくり、一瞬だけ青一色にすることに成功。

『ふ、ぎけるなあああああ!!! 貴様ツ！何をしているのか理解でき  
ないのか!!』

「…!」  
アンリミテッド・マターナルツ!  
『無限の母性!』

調律で常に上書きし続けるという力業を使い、最終契約を断行した。

抵抗は気にしないのだった? 問題ない。

魂の解析で、どうも抵抗には魔力的なものと霊的な物の二種類がある事が分かった。

青の魂はもう受け入れる気マンマンだったので、リンカーコアの波長を青に合わせてやればどれだけ金が抵抗しようが関係ないのだ。

『おのれおのれおのれおのれおのれえええ!!』

数秒ほどで『青のリンカーコア』との間に強固な? がりが生まれ、金が急激に押し返され始める。

しかし金色はまだ消えず。

私の魔力を青に調律して渡してもイマイチ爆発力が足りなかった。

『レゾナンス共鳴』ごめん、なのは」

なのはのリンカーコア（SSSの八割+元々本人が持ってたやつ分）の魔力を頂戴して、調律した端からどんどん注ぎ込んだ。結構手荒く行ったので少し痛いと思うけど、仕方ない。

さて、あとは魔力を注ぎつつ二人をしつかり抱きしめて五段階目が終わるのを待つだけだ。

三分後、アリサの方はぐっすりとおねむになっていて、無敵バリアが発動していた。

どうやら五段階めが始まった時にバリアは自動で発動するらしい。そりや姿勢を崩せないんだから邪魔されないようにするのは合理的ではある。

私にかかっているバリアだって無意味ではない。多分夜風を凌げてはいるんだ。感覚はそのままだけど。

十分後。青が安定してきたので、なのはからの魔力吸収を緩やかか

つ無理のないものに切り替えた。

相変わらず繊細な作業であるのには変わりないけど、幾分かマシになつてるといいなあ。

二十分後。もうイヤな予感しかしない。

何故かつて？

そりやなのはの二の舞と言う意味もあるし、それ以上に精神的な辛さも前より上だからだ。

常に『調律』をなのはと佐神くんなどで二重発動しつつ、私のコアを経由する時さらに二つ処理を噛ませなくちゃいけない。その上ちよつとでもコントロール失ったらリンカーコアがぶっ壊れる。いわば精密機器を二台同時に別々のツールで弄り続けているようなもの。疲れないわけがないよね。

それでも集中してれば慣れてくる辺りは流石神の才能と言ったところ。

まだ金ぴかには残ってる。魂の方に流した魔力でなんとか3:7の状態にはなつたけどさ。

凄いしぶとさだったんだね、青。

私となのはの全魔力で消しきれないモノと一体どうやって拮抗してたんだろうか、つくづく不思議でならない。

一時間後。

… うん。知ってたよ、まだ終わらないね。

金ぴかと青の勢力図は1:9、逆転した形にはなるんだけど… なーんだか最後の粘りが強い。

青の浸食速度が鈍くなった。

佐神くんの目は完全に青く、髪も綺麗な銀髪に揃った。ここから逆転なんてことにはならないだろう。

二時間が経過。公園の時計では午後三時を指している。ちかれた。でも面倒だからって手を抜けないこの感じ。いわゆるですマーチってやつかなあ。

佐神くんも流石に寝ちやつたよ。二人とも気楽でいいねえ、すごくかわいい。手慰みに撫でてみると何だかミルクの良い匂いがする。

髪はサラサラだし、気持ちいい。ずっと甘やかしたい。

四時間が経過した。いい加減にしてよ金ぴか。

ずっと二つ以上の事を同時にやってたからなのか、何か思考が分割して出来るようになった。

よし、これを『並列思考』と名付けよう。

めんどくさいとかぶつくさ言ってるメイン一番、なのはからの魔力吸収が二番、佐神君への魔力譲渡三番、なのはと私の調律四番、私と佐神くんの調律五番。その他文句勢は六から三十番！

… 流石に前世が貧相だったとしても、思考を三十分割出来るのは異常だと分かる。神の才能だろう。

ありがとう神様… 頂いた才能は絶対腐らせないよ…

六時間経過。時刻は午後の七時。

精神的な疲労は分割思考のお陰で随分楽になった。幾つかのタスクでルーティンを組んで休ませている。

その処理分総量は増えてるんだけど、休憩を挟んだら不思議と楽になった。

というか、今この瞬間にもタスクの数は増やしているので一桁番台は休みっぱなしだ。

なんなら交代のペースより増えるタスクの方が多くなりつつある。才能すごい。

八時間経過。

やばいな、いろいろと。もうすっかり日が落ちてしまった。

処理のほうはタスク増やすぎてもう瞬きと同じくらい自然にできてるけどさ… 無敵バリアのフィードバックがとにかくきつい。

自分と二人とで合計三倍だ、三倍。寒すぎる。

何故私には以前より厳しい苦難の道が示されるのだろうか。後先考えないからだね、うん。

分かっているけど、自重してつまらなく生きるのはもっとゴメンだ。私はこれからも無茶するぞー。

朝の六時。

タスク数、6472894682。コレ正確に数えられるのもすごいよねえ…

わざと魔力処理ループをタスク数ギリギリまで小刻みにやったり、魔力を並列で注いだりして調律技術を鍛えてたらめっちゃ増えた。

佐神くんは青、アリサは赤の疑似リンカーコアと順応し、五段階め終了。

長い… 戦いだった…

真っ白の部屋。

ガラス越しに見える白衣の男女。

…見慣れた光景だ。憎たらしい程に。

「——先生。もう、良いですか？」

「何が良いものか、彼女は貴重なサンプルだぞ」

相変わらず固有名詞を使ったがらない珍妙な会話。

時折出てくる不穏な単語。

「そうは行っても…もう耐えられるような体じゃないんですよ」

「なら、死ぬまでの時間を使ってやれば良いだろうが」

「ナニが出来るって言うんです、あの状態で」

「そうだな…魂の重量を計る、なんてのはどうだ？」

「…まともに取り合う気は無いつて事ですね」

「当たり前だ。処分は私達で行わなければならぬ。アレには残留物

が多すぎる」

「でも…っ一般の医療施設に入れば、まだ助かる可能性はある筈だ」

「そうだな、確かに可能性はゼロではない。」

「ならっ！」

「それが、現実的な数字で無いのはお前でも分かるだろう？」

「…………それは、そうですが」

「ハイリスクノーリタールの賭けなんぞ誰がするものか、愚か者め」

コレは確か、私が最後に病室を見た日の記憶。

「…外出許可は出してやる。条件付きだがな」

「何ですか、その条件は」

「一切の救命活動の禁止。発作を起こして死亡したら遺体を必ず持つ

て帰る。この二つだ」

「…よくそこまで外道になれたものですね、先生」

「好きに言え、私とて好きでやってるんじゃない…仕方なく、やって

るんだ」

? せぎすの青年と、白髪の女が何やら口論してて。

「…行つたか。まったくケツの青いガキめ、現実を見ないで理想論ばかり語って」

この後、捨て台詞を吐いた青年に連れ出されている途中で私は発作を起こすんだ。

「おい『』』どうかな、調子は」

残った女は憂鬱そうにガラスを殴ってから、パソコンを向き。

何とは無さそうに声をかけてくる。

「返事は無し、か。まあいい」

全く気味の悪い、いつも死ぬ寸前までは放置しておく癖に。

いざ死ぬとなった途端に善人ぶられてもいい迷惑だ。

普段はまるで口を聞きたがらない女が、何の心変わりだったのだろうか。

「冥途の土産に、一つ聞いていけよ。関係ある話だ」

これから、つまらない話を聞かされるのだ。

相槌も打てない私が、青年に連れ出されるまでの間。

「… お前に出会えたのは… まあ、偶然ってやつだったんだろうな」

「遺伝的障害と、重篤な免疫不全。雨夜のダンボールで死にかけだったお前がウチに来たのは

… 全く、奇妙な事この上なかったよ」

「なんせウチは治す機関じゃあない。根本的に治らない物を、治らなのままに克服するための技術を研究していた」

そこまで一息に捲し立てると、何がおかしかったのかくつくつくとして笑う。

「… いや、そういう意味じゃ不治の病っていうのは合ってたのかもなあ」

そのたびに長い前髪が揺れていたのを、よく覚えていた。

「不老再生細胞… 初めて見た時は自分の目を疑ったね」

そうやってパソコンの画面を見せられた。

まるで理解できない。そもそも文字がぼやけてるし、グラフもまともにも認識出来ない。

「どんな人間でも、お前の細胞に適合すれば永遠を手に入れられる。

生死を問わず、男女を問わず」

そしてこう言うのだ。惜しむらくは、適性の無い人物に毒性が極めて高い事だ。と。

「全細胞に全能性を齎す事によって生まれる再生能力。そして適合した時点から老いることの無くなる不老。どちらも手に入れるまで平均五年を要するが、非常に強力なものだ」

次に表示された動画は、前世の私でも理解出来た。

下半身を挽がれた人間が二日ほどかけて新たに生やす光景。

「この動画を見る。バイオリクターを装着せず、シルクタンパク質ベースのヒドロゲルで傷口の保護すらしていない。そもそも、ステロイドホルモンであるプロゲステロンの投与すらしていないというのにこの再生速度」

「肝心の再生精度も最高だった。なにせこの子、この後歩いたんだよ？」

「トカゲのしっぽみたく脊椎骨再生に失敗することも無い。哺乳類が内臓や脳までヤモリの手足の如く完璧に再生できるなんて、夢みたいだとは思わないかなあ」

思わない。

そもそも私自身はそんな力の恩恵を受けた事は無いし、知った事じゃなかったからね。

この女、ヒートアップすると口調がフランクになる。

あの青年や他の白衣の前じゃ格好つけてるのに…

…今思うと、私は口がきけないから大樹の洞代わりにでもなつてたんだらう。

いわゆる愚痴の壺ってやつ。

「無論、お前も再生能力は持っているのさ。惜しむらくは、設計図<sup>D</sup>が壊れているせいで病気は治らないってところか」

「健康体のサンプルとしては使えないんだよねえ」

こうして話を聞いていると、私ってまさにモルモットになるため生まれて来たみたいだな化け物だよなあ。

人間離れした再生能力を持つものの、免疫力が無いせいで他者の庇

護下でしか生きられず。

話せないからどんな酷い事してもバレる心配がない。

どんな傷や注射痕だつてキレイさっぱり無くなってしまふ。

見聞きできる範囲では証拠が何にも残らないのだ。

「ま、お前からすりや体質も病気もとんだ災難だろうとは思うけどさ。

お陰様で随分と多くの難病患者の命を救えたんだよ」

「だから最後に…」

その時、私から見て女の反対側にあるドアから青年が出て来た。

『…』さん。少し、外に出ましようか」

「… 時間だな。約束は守れよ」

「はい… 大人、ですから」

腕から点滴が抜かれ、血塗れの服から綺麗な患者服に着替えさせられる。

無骨な車椅子に乗せられると一般病棟の患者と遜色ない見た目になり。

「… 相変わらず、気色悪い目だな」

最後に悪口を言われて、病室を後にした。

「なあ、なあ… おい、起きろ」

「んあ…？」

目を開いたら青目銀髪ロングヘアの超絶イケメンがいて、私がベッド脇から揺すられていた。

… なんだこの状況？

確か今朝まで私は公園で『ちーと』を使つてた筈なのに、なーんで暖かい室内のベッドで目覚めたのさ。

「… 佐神くん？(トク)ど(トク)？」

「ボクの部屋のベッド。君、ボクが起きた途端に倒れたんだ」

はあ、佐神くんに搬送されたってわけか。

なるほど。よく考えてみずとも午後一時から午前六時まで、十七時間近く集中しっぱなしだったら倒れるのもあたりまえだ。

「そっか、ありがとね」

「別に。元々ボク達が君にちよつかいかけて、助けられたんだ」

まだ眠い…。もう少し寝させて貰おうかなあ。

流石に寝てる人間を追い出すほどヤバい人はそうそう居ないだろうし。

なんか佐神くん、別人みたいにおとなしくなってるようだから丁度いい。

泊まらせてくれないか後で頼んでみよう。

「ん。それじゃおやすみ」

「しつかし良い布団だ、暖かくてふわふわで柔らかい。頭からかぶると真っ暗になる。」

私は寝るとき真っ暗の方が好きなタイプなので、遮光性高いのは嬉しい。

「…何も聞かないのか」

「何の事さ？」

「君もボクと同じ『転生者』なんだろう。どうしてあの時ボクを助けた？」

鼻から上だけを出して目を合わせると、佐神くんから僅かに何かか噴き出すのを感じた。

何だろう、この感情は。好意、愛、どちらでもない。劣情と言うには綺麗すぎる。佐神くんは魔力が切れた私の眼を、どんな風に見ているんだろうか。

「助けられた理由が知りたいってこと？」

「そうだ。何も知らないまま利用されるのだけは嫌だ」

そんな事言われたって、別に損得で助けた訳じゃない。

その意味だとアリサの方が適切だろう。

助けるも何も佐神くんをおかしくしたのも私だし、ぶっちゃけマツチポンプ。

あの子は自分の物にしたかったから『ちーと』の餌食にしたんだよね。

「嘘や建前だろうと構わない。言ってみてほしい」

悩んでいるとおでこをつついて急かされた。

ええい、頭を揺らさないでくれ。少し頭痛がしてるんだ。

理由、理由だな。ええと。

「強いて言うなら『助けて』って声が聞こえたから助けた。それだけ」

「…」  
おでこから離れた指が顎を掴み、佐神くんは近くの椅子に座り込んだ。

その姿はまるで、かの有名な像『考える人』のよう。

「信じられないかな?」

「… 信じたい気持ちはある。だけど、これも『ちーと』で植え付けられた物なのかもしれない」

そう言つて彼は自分の頬をつねる。

かなり力を込めていたのか、痕がくつきり残つて。少しだけ出血もしていた。

「自分が信じられないんだ。昨日の事で」

「何がどうなつて、あんな風になつてたのさ」

「話せば長くなる」

「別にいいよ?」

佐神くんの話はこうだった。

まず交通事故で死に、神様の元へ招かれ。

そこで好きな作品の世界に転生出来ると言われて、『アリサ・ローウエル』を救うためにとらいあんぐるハート3の世界を希望。

四つめの『ちーと』として『英雄王の宝具』を選び、えつと?」

『宝具は…座?…つていうところにある魂と紐付けされているので、融合する必要がある』という前置きを承諾し、転生。

覚醒後すでに『アリサ・ローウエル』が死亡しており、身体の主導権を失つた…そうだ。

「それならあのアリサは一体何者なのさ、平然としてたけど」  
「死亡直後に魔法で生き返らせた」

…ん？魔法？

どういうことだ。リンカーコアを持たない佐神君が魔法を使える訳が無い筈なのに。

「リンカーコア無いのにどうして魔法が使えるの？」

「『チート』にあつたら？祈願実現型魔法。それだ」

…祈願実現型魔法？なにそれ。

死者蘇生が出来るなんて凄まじい力じゃないか。

私は正直、神の間は適当に領きまくってただけだから忘れてた。

だって明確に頼んだのは容姿の『引継ぎ』だけで、あとは神様のおススメのままだし。

『ちーと』って他にもあつたんだね…

「…覚えてない。『ちーと』のラインナップってどんなだったっけ」  
佐神くんは眉を寄せて尋ねた結果、選べる『ちーと』は九つあつたらしい。

まずはこの三つから一つ。

『神の才能』 ありとあらゆる分野の才能や資質を与える。個人差あり。

『鋼の精神』 決して折れることない精神を得る。

『祈願実現型魔法』 払った代償に見合う願いであれば、何でも叶えられる。

二つ目

『引き継ぎ』 前世の能力を来世に上乘せ。

『デバイス』 好きなタイプを自作出来る。

『英雄王の宝具』 人気だったから選択肢に入れたらしい。色んな物を取り出せる。

三つ目と四つ目はこの内二つ。

『有償の愛』 様々な愛に関する能力付与。

『リンカーコアSSSS』 その名の通り、凄まじい魔力を保有する。

『痛覚無効』 痛みを感じない。

… 多分私は上から順番に取っていったのだろう。  
余りに適當すぎるね。

「ボクが取ったのは『祈願実現型魔法』『英雄王の宝具』『有償の愛』『痛覚無効』だ、君はどれ選んだ？」

「多分私は『神の才能』『引き継ぎ』『有償の愛』『リンカーコアSS S』… だと思う」

「… 『引き継ぎ』なんて無意味だろ」

「言わないで、自分でも分かってるから。」

「いや本当に引き継ぎは微妙… だつて無敵バリアあるし、どう考えても痛覚無効の方がいい。再生能力なんかあつたつて痛いものは痛いんだから。」

「なあ、君は原作をどれくらい知ってる？」

「私がそれなりに後悔していると、佐神くんが口を開いた。」

「… 原作？ なんだそれ。とらいあんぐるハート3の事を言っているのなら、名前すら聞いた事がない。」

「全く知らない」

「それじゃ、『リリカルなのは』は？」

「リリカル、がどうかは知らないけど… なのはとは一昨日出会ったかなあ」

「小学校には入学していたか？」

「いや、まだだったね。多分」

「… 成る程な」

「そう呟くと、ポケットからボールペンと手帳を取り出して何やらすらすら書き始めた。」

「時に眉間を抑えながら。」

「こんな事聞いて何になるのさ、佐神くん」

「万が一を想定しての行動、つてやつだ」

「書き上がった手帳が投げて寄越される。」

「それに、知る限りの原作知識が書かれている。ボクは海鳴市以外の小学校に進学するから… もう君と合う事は無い」

「原作知識って何？」

「見れば分かるものだ、とにかく読め」

言われるままに皮の丁装を開くと目次が出て来た。

一応本としての体裁を取っているのか、ページも割り振られている。手書きで。

「…ここまでこだわる必要あったのかなあ」

「とにかく設定が多いからな。時系列ごとの考察まで入るとなると、殴り書きじゃ不都合だ」

黙々とページを読み進めて、リリカルなのは（無印）の情報をあらかじめ広いかた広い集め。

とらハ3とリリカルおもちや箱の設定と照らし合わせていくと…どうも今の状況と合致しない部分が出てくる。

「あのさ、昨日居たのはアリサ・ローウエルなんだよね？」

「そうだ」

「矛盾してない？」

「してるな。アリサ・ローウエルは孤児だ」

「それに、とらハ3の時系列だと死亡したのは十歳の時で、二年後に八歳のなのと出会うって書いてあるんだけど…」

「この世界だと二人は恐らく同年…だな」

「これじゃ、まるで『リリカルなのは』みたいじゃないか」

「…夜の一族の項は見たか」

「見たけど？」

「この世界に、月村すすかは存在しない。彼女の両親はとらハ3と同様の末路を辿ったらしい…この意味は、分かるだろ」

…  
へ？

「ここは『とらいあんぐるハート』でもなければ、完全に『リリカルなのは』という訳でもない世界って事だ」